

地域との連携、何から始め、どこを目指すか

「評価」を活かした目的設定と学習環境づくりの提案

学校と地域が対等な立場で協働し、持続的に成果を上げていくためには何があれば良いのでしょうか。先進的な取組を行う高校を対象に調査や分析を行い、関連の政策レポートや著書もある三菱UFJリサーチ&コンサルティングのご担当者、学校と地域の協働体制づくりについて寄稿いただきました。



三菱UFJリサーチ&
コンサルティング株式会社
政策研究事業本部
きたした 喜多下 悠貴

東京大学大学院教育学研究科修士課程
修了後、2012年より現職。「地域協働
による高校魅力化ガイド」(2019、岩波書店)
において、地域と協働した高校づくりに
おける評価の活用方法等について執筆。

高校と地域が 対等に協働していくために

新学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」を具現化する一つの方法として、高校教育の現場では「高校と地域の協働」というキーワードに注目が集まるようになりました。こうした活動に先行的に取り組んできた高校では、地域社会を舞台として、その課題解決や魅力発信をテーマとした探究的な授業づくりや、高校生を主役とした地域活性化活動など、さまざまな事例が生まれてきています。こうした潮流の中で、文部科学省は令和元年度から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」を立ち上げ、地域との協働によるカリキュラム開発に取り組み高校の支援を始めました。当社は本事業の指定校に対する実行支援や評価を担う事務局として、

地域との協働に取り組む多くの高校と関わりをもたせていただいています。この事業の中で各校に求められているのが、高校教育関係者と地域の関係者などからなる「コンソーシアム」という協働体制を設けること。高校と地域が対等な立場で生徒の学びの実現のために対話、協働していくにあたり、こうした体制が非常に重要であることは改めて言うまでもないことです。しかし、具体的に推進していくにあたり、こうした対話・協働の場をどのように活用していけばよいのか、より直接的に言えば、何から話し合いを始めればよいのかについて、悩んでいる高校も少なくないのではないかと感じています。本稿では、こうした実践的な課題に

対して、我々の経験を基に、高校と地域との対話・協働の土台をつくるための2つの「ネタ」を提案したいと思えます。提案のカギとなるのが、「評価」の

仕組みを使った「現状の見える化」。我々が地域との協働に取り組む高校の支援を行う際に用いている「高校魅力化評価システム」という評価ツールを事例に、ご紹介していきたいと思えます。

1 評価指標を道具に 「目的」を共通認識化する

「高校魅力化評価システム[※]」は、当社と(財)地域教育魅力化プラットフォームが共同で開発した、地域と協働した魅力ある高校づくりの実態と変化を「見える化」することを目的としたアンケート調査です。調査は主に対象となる高校に所属する高校生に対して実施

時期尚早と捉えられがちですが、実はそうではありません。何らかの活動を評価しようと思う時、その最もオーソドックスな方法は、その活動の「前」と「後」の変化を見ることです。そして、活動前後の変化を見るためには、活動の「前」に、その成果を検証するための物差し(＝指標)を決め、それを測っておく必要があります。こうした意味で、実は評価というのは、活動の後よりも、活動の前の調査設計の方が大切です。さて、ここで非常に重要なのが、活動の前に成果を測る指標を設定するということは、その活動の目的を設定することと同義であるということです。そして、地域との協働において最優先と言ってもよいほど重要なのが、活動の目的に対する共通認識を関係者間でもつこと。「何のために協働するのか」という共通認識を伴わない地域との協働は、高校、地域の双方にとって、徒勞

なくないのではないかと感じています。本稿では、こうした実践的な課題に

対して、我々の経験を基に、高校と地域との対話・協働の土台をつくるための2つの「ネタ」を提案したいと思えます。提案のカギとなるのが、「評価」の

仕組みを使った「現状の見える化」。我々が地域との協働に取り組む高校の支援を行う際に用いている「高校魅力化評価システム」という評価ツールを事例に、ご紹介していきたいと思えます。

※詳細は喜多下・阿部(2019)「[魅力ある高校づくり(高校魅力化)]をいかに評価するか～「高校魅力化評価システム」の開発を事例として～」三菱UFJリサーチ&コンサルティング「政策研究レポート」(https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2019/11/seiken_191122_3.pdf)を参照



図1 高校魅力化評価システムで用いている「生徒の資質・能力」に係る主な指標(抜粋)

資質・能力の視点	質問項目例
主体性	<ul style="list-style-type: none"> ●うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む ●目標を設定し、確実に行動することができる / 等
協働性	<ul style="list-style-type: none"> ●自分とは異なる意見や価値を尊重することができる ●共同作業だと、自分の力が発揮できる / 等
探究性	<ul style="list-style-type: none"> ●勉強したものを実際に応用してみる ●複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ / 等
社会性	<ul style="list-style-type: none"> ●将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある ●将来、自分の今住んでいる地域で働きたいと思う ●将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい ●18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う / 等

図2 高校魅力化評価システムで用いている「学びの土壌」に係る主な指標(抜粋)

学びの土壌の要素	質問項目例
挑戦の連鎖を生む 「安心・安全の土壌」	<ul style="list-style-type: none"> ●挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある ●人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある / 等
協働を生む 「多様性の土壌」	<ul style="list-style-type: none"> ●ありのままの自分が尊重される雰囲気がある ●自分と異なる立場や役割をもつ人との関わりがある / 等
問う・問われる 「対話の土壌」	<ul style="list-style-type: none"> ●お互いに問いかけあう機会がある ●将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる / 等
地域や社会に 「開かれた土壌」	<ul style="list-style-type: none"> ●地域から大切にされている雰囲気を感じる ●地域の人や課題など、興味をもったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる大人がいる ●自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある / 等

出所) 図1、2ともに喜多下・阿部(2019)より作成

「前」の生徒の資質・能力などに関する認識の現状を「見える化」します。次にこの結果を、コンソーシアムの参加者間で共有します。まず実施するものが、個人、あるいは数人のグループ単位で、数あるアンケートの設問(指標)の中から「地域との協働を通して、伸ばしたい生徒の資質・能力」を優先度をつけて抽出してもらう作業です。次に、抽出した指標に対するアンケートの結果を確認します。その結果が望ましいと思うか、そうではないかなど、現状認識とそれに対する判断を基に、「伸ばしたい生徒の資質・能力」に対する考察をさらに深めていきます。小集団単位での考察をさらにコンソーシアム全体で共有していくことで、徐々に地域との協働により目指す生徒の成長についての共通認識を構築していくことを目指しています。

共通目的の設定という点、ややもすると抽象的な議論になり発散しがちです。また、多様な主体が関わる会

で育成が目指されている生徒の資質・能力などの要素を、**図1**のように「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4要素に整理し、質問項目に落とし込んでいきます。

我々が地域との協働に取り組む高校の支援を行う際は、まずは高校にこのアンケートを実施してもらい、活動「前」の生徒の資質・能力などに関する認識の現状を「見える化」します。次にこの結果を、コンソーシアムの参加者間で共有します。まず実施するものが、個人、あるいは数人のグループ単位で、数あるアンケートの設問(指標)の中から「地域との協働を通して、伸ばしたい生徒の資質・能力」を優先度をつけて抽出してもらう作業です。次に、抽出した指標に対するアンケートの結果を確認します。その結果が望ましいと思うか、そうではないかなど、現状認識とそれに対する判断を基に、「伸ばしたい生徒の資質・能力」に対する考察をさらに深めていきます。小集団単位での考察をさらにコンソーシアム全体で共有していくことで、徐々に地域との協働により目指す生徒の成長についての共通認識を構築していくことを目指しています。

具体的活動が「何をするか」であるのに対し、学習環境とは、「どのような環境の中で、その活動をするか」という点に着目する考え方は、環境といつても、学校施設などのハード面のことではなく、我々は「生徒の周囲を取り巻く雰囲気、人との関係性、機会」といったソフトな側面に着目しています。高校魅力化評価システムでは、こうし

感を生み出すだけの活動に陥ってしまいかねません。

一方で、多様な主体が関わる中で、目的に対する共通認識をもつことは、言葉にするほど容易なことではありませぬ。この難しいプロセスを少しでも効率的に行ううえで、我々は、「評価」を活用し、成果指標を設定する

プロセスを協働で体験することが効果的と考えています。

地域との協働における共通目標設定のプロセスに、評価の仕組みがどう役立つのか、より具体的に説明していきましょう。高校魅力化評価システムでは、地域との協働に先行的に取り組み高校の事例調査などを通じて、そこ

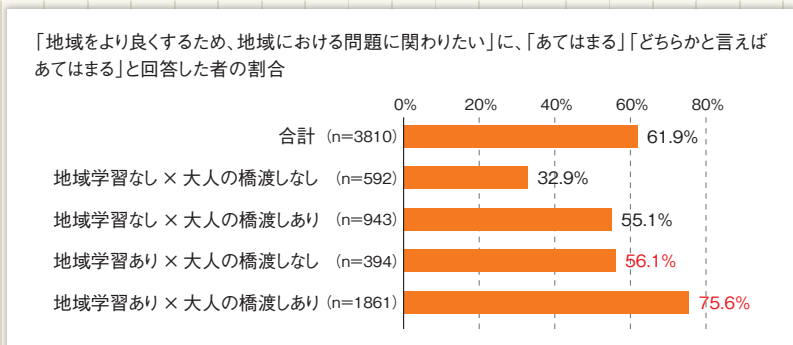
「前」の生徒の資質・能力などに関する認識の現状を「見える化」します。次にこの結果を、コンソーシアムの参加者間で共有します。まず実施するものが、個人、あるいは数人のグループ単位で、数あるアンケートの設問(指標)の中から「地域との協働を通して、伸ばしたい生徒の資質・能力」を優先度をつけて抽出してもらう作業です。次に、抽出した指標に対するアンケートの結果を確認します。その結果が望ましいと思うか、そうではないかなど、現状認識とそれに対する判断を基に、「伸ばしたい生徒の資質・能力」に対する考察をさらに深めていきます。小集団単位での考察をさらにコンソーシアム全体で共有していくことで、徐々に地域との協働により目指す生徒の成長についての共通認識を構築していくことを目指しています。

我々が地域との協働に取り組む高校の支援を行う際は、まずは高校にこのアンケートを実施してもらい、活動

議では、同じ言葉でもその意味するところが実は異なるなど、独特の対話の難しさがあります。こうした課題に対し、評価の仕組みを用いて、具体的な設問、指標、そして生徒の実態を共通基盤にした議論を行うことで、地に足の着いた建設的な対話が可能になると考えています。

2 評価結果を振り返り「学びの土壌」の質を上げる

図3 「地域学習」・「大人の橋渡し」の有無と生徒の成長の関係性



出所) 鳥根県(2019)「高校や地域の学習環境アンケート」における高校魅力化実践校(16校)の調査結果より作成

「地域をより良くするため、地域における問題に関わりたい」に、「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答した者の割合を示しています。表側では、「地域学習」「橋渡しする大人」それぞれの「あり/なし」によって、生徒を4つの類型に分類しています。前者は活動内容(何をやるか)に対応するもので、「地域の課題の解決方法について考える」学習活動の有無によって分類されます。そして後者が、「学びの土壌」に対応するもので、「地域の人や課題など、興味をもったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる大人がいる」という、生徒を取り巻く地域の大人や教職員の「あり方」について生徒に尋ねる質問になります。例えば、地域課題について考える学習機会、橋渡しをしてくれる大人の両方に「なし」と回答している生徒群では、「地域をより良くするため、地域における問題に関わりたい」と思う生徒は32.9%にとどまっています。

このグラフで興味深いのは、「地域学習あり×大人の橋渡しなし」の群と比べて、「地域学習あり×大人の橋渡しあり」の群では、地域に関わりたいと回答する生徒の割合が20ポイント近く高くなっているという点です。この結果から、「何をやるか」に加えて、その活動を支える学習環境、この例でいえば「大人のあり方」が生徒の意識に与える影響は、無視できないものであることを感じていただけたと思います。

実は、高校魅力化評価システムの調査結果を基にした研修の場で最も盛り上がるのが、この「学びの土壌」に関する結果を基にした振り返りの時間です。生徒の評価を通して、地域の学習環境の質を支える地域の大人や教職員自身のあり方が見える化されることで、個々の大人が「自分ごと」として、内省を深める機会を提供できているようです。

研修では、「学びの土壌」に関する生徒の回答結果を見ながら、各校の学習環境の強みや課題を見つけていきます。また、その結果と、「育てたい生徒の資質・能力」を照らし合わせることで、目的とする生徒の育ちを達成するために、高校、地域が共に高めていくことを目指す「学びの土壌」は何なのかについて考えていきます。

地域と協働した授業づくりを、明示的なカリキュラムのマネジメントとすると、「学びの土壌」づくりは、非明示的な(＝隠れた)カリキュラムのマネジメントと表現することもできます。個々の活動の中で、生徒に関わる大人がどのように振舞うか、どのような価値観を伝えていくかという視点も加え、「カリキュラム・マネジメント」をより広義の意味で捉えることで、地域との協働関係をより一層深めていただきたいと思います。

「評価の仕組み」を
高校と地域の協働の土台に